

# 2017 GPIC 5<sup>th</sup> Symposium Digest Report

2017/9/22

GPIC 研究会

## 【今回のテーマ】

近時の、技術進展の著しい IoT、AI というサービス産業に密接に関連した技術分野の動向に注目し、その全体動向をアカデミアの視線から経済学の視点で俯瞰して頂くと共に、当該分野で活躍しているグローバル企業のビジネスモデルを紹介してもらうことで、「技術で勝って、ビジネスでも勝つ」という GPIC 研究会発足の精神の実現のために役立つ基礎情報を共有する機会とする。

## 【開会の辞】

西口泰夫 GPIC 会長

(株式会社ソシオネクスト代表取締役会長兼 CEO)



「技術で勝ってビジネスでも勝つ」という志を実現するためにこれまでも研究・議論し、サービスとテクノロジーの相互関連性が重要であるという認識に至っている。今回のシンポジウムでは、IoT、AI 時代を牽引するグローバル企業の状況から、我々の進むべき方向性を検討したい。また、同じ志を持つ方は、本研究会への参加を歓迎する。

## 「IoTとAIが牽引するシェアリングエコノミー」

同志社大学技術・企業・国際競争力研究センター長（政策学部教授）

三好 博昭 教授

(メッセージのポイント)

「共有」という概念は IT テクノロジーの発展によりその価値観を大きく変える分岐点を迎えている。IoT の飛躍的な進展の結果、貸し手側の残余コントロール権は大幅に増大し、近時のシェアリングサービスにとって強い追い風となっている。また、「共有」の対象として最も重要なのは「データ」という無体財産である。いかにして、「データ」の共有化を推し進め、その価値を最大化するのが社会全体で検討すべきポイントである。「データの共有化」によりチャンスが芽生えるベンチャー企業の育成も視野に入れた産業政策論が重要となる。その成否は、年代、技術、国民等、社会科学と自然科学を俯瞰した議論の発展とそれを担う人材の育成が鍵を握り、大学の果たすべき責任は大きい、と自覚している。



## 「IBM が切り開くコグニティブコンピューティングの世界」



日本アイ・ビー・エム株式会社 グローバルビジネスサービス  
理事/パートナー 重工業産業担当  
谷本 和久 様

(メッセージのポイント)

IBM Watson は、紹介応答型のサービスから導入が進んでおり、機械学習、自然言語処理、画像認識、知識表現等の周辺技術の改良とともに、より高度なサービスを提供するフェーズへと進んでいる。同時に、次世代技術として、現状のコンピュータでは不可能な領域にハードウェアとして低消費電力化が可能なニューロチップ、多値情報を同時処理できる量子コンピューティングチップ IBM-Q 等の次世代技術についても着実に研究開発を進め、新たなサービスを欲するユーザのニーズに応える姿勢を整えている。

## 「加速する AI 利用と日本の取り組みの方向性」

インテル株式会社 戦略事業企画室 ディレクター  
杉野 貴美広 様

(メッセージのポイント)

デジタル・ディスラプションと言われるデジタル化による産業構造の変革に続き、AI の登場がこの変化をさらに加速している。近時の AI は、データセンター、クラウド等、その活用の基礎となる研究開発成果の登場で、確実に「使える技術」として位置づけられる。米国 IT ビッグ 5+中国 BAT は、AI の性能を決定する「データ」という主戦場で、すでに激しい主導権争いを展開している。AI の成功には「データ」の存在が不可欠であることから、日本企業は、「データ」として未開拓な農業、製造業というものづくり関係の「データ」資産を有効に活用することで、地に足のついた成功シナリオを描いて欲しい。



## 「真のスマート社会実現に向けた a r m の取り組み」

アーム株式会社 代表取締役社長  
内海 弦 様



(メッセージのポイント)

a r m のビジネスモデルの基本は、a r m にしかできないコア技術の開発とそれを利用するパートナーとの相互依存で成立している。この関係を構築するために a r m は低消費電力化への貢献という技術的特徴に加え、ライセンス専業という半導体市場において競争環境を維持しやすいビジネスモデルの導入、パートナーとの橋渡しとなるインタフェース環境、近時は、特にセキュリティに配慮したトラストゾーンを含めた、環境整備に注力している。a r m の特徴は、パートナー企業のビジネスモデルを援助し、技術の継承を尊重する精神であり、また、現時点では、数少ない日本の半導体企業であることを忘れないでほしい。

(以上、文責、GPIC 研究会)